

自転車を活用した まちづくり



にしざわ ひさお
西澤 久夫
ひがしあさひ
東近江市長(滋賀県)



ほり もとし
堀 元
こうなん
江南市長(愛知県)



ふじい しんご
藤井 信吾
とりで
取手市長(茨城県)



はつどりのぶあき
服部 信明
ちがさき
茅ヶ崎市長(神奈川県)

司会・コーディネーター

ほそかわ たまお
細川 珠生

政治ジャーナリスト

「車社会」は利便性をもたらした一方で、慢性的な渋滞、排気ガスによる大気汚染など、種々の問題も引き起こしています。こうした中、無排気の観点から環境負荷が少なく、住民の健康増進にも効果がある自転車の役割が再評価されています。

今回の座談会では自転車を活用したまちづくりを積極的に進めている服部信明・茅ヶ崎市長、藤井信吾・取手市長、堀元・江南市長、西澤久夫・東近江市長にお集まりいただき、実際の取り組みの内容、その効果、課題、今後の展望などについてお話しいただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)

事故の防止には、子どもたちにも、十分に当事者意識を持ってもらうことが大切。そのための仕掛けを工夫しています。



服部 信明
茅ヶ崎市長(神奈川県)

自転車をいかに、まちづくりで活用するか

細川 市民の健康増進、さらには環境負荷の低減という面から国際的に注目を集めている乗り物。それが、自転車です。フランスのパリ市をはじめ、欧州のさまざまな都市でコミュニティ・

左岸にある遊歩道・サイクリングロードを整備したことにより、国営木曾三川公園の一つである「フラワーパーク江南」(江南花卉園芸公園)、「総合運動公園蘇南公園」、展望タワーなどもある「すいとぴあ江南」など、左岸流域に点在していた各種施設が有機的に結ばれることになりました。

このサイクリングロードの整備を記念して、昨年の11月に開催したのが徒歩と自転車による地域イベント「こうなん木曾川YUYUウォーク・自転車散歩」です。多くの人に遊歩道・サイクリングロードはもとより、市内の観光名所なども回っていただきましたが、大好評でした。成功のポイントは、市民と一体となり、地域を挙げてイベントを展開できたことです。実行委員会には、市や商工会議所だけでなく、ボランティアグループなどにも入っていただきましたし、市内の小中学校にも協力してもらったために、各ポイントで、プラスチック演奏、焼き芋やお茶の提供など、さまざまな催しを実施することができました。今後も、継続的に開催する予定です。

西澤 東近江市と自転車とのかかわりは長く、既に約40年前の昭和48年、脱公害と市民の健康増進を目的に自転車都市宣言を行っています。これをきっかけに、自転車歩行者優先道路の整備を進め、現在は全国でもトップクラスの総延長150kmに及んでいます。さらに、市役所周辺など、一部の地区では自転車専用道路も設けるなど、大きな成果が挙がっています。

ところが、年が経過するにつれて、こうした取り組みも下火になってきました。そこで、環境問題がクローズアップされる中、もう一度自

サイクルが導入されるなど、世界中で利用促進が進められています。もちろん、この日本でも、都市レベルで自転車専用道路の整備やコミュニティ・サイクルの導入が進んでいることは、ご存じの通りです。

本日は、中でも積極的に自転車を活用したまちづくりを進める都市の市長にお集まりいただきました。それでは、各市で実施している自転車を活用したまちづくりの内容などについて、お話しいただけますか。

服部 茅ヶ崎市は市内の約6割が平坦な地域。おのずと以前から身近な交通手段として、自転車は盛んに利用されてきました。ただ、その一方で、「自転車利用のルールやマナーが守られていない」「駐輪場が少ない」など、さまざまな課題が指摘されていたのも事実です。そうした課題に対応するため、茅ヶ崎市では平成16年に「ちがさき自転車プラン」を策定。「自転車利用の適正化」「市民生活と自転車が共存できるしくみづくり」「使いやすい駐輪場の整備・運営の見直し」など6つの基本方針を立て、以来、これに基づき「自転車のまち 茅ヶ崎」を実現するための各種施策に取り組んできました。

中でも茅ヶ崎市が力を入れてきたのが、交通安全の徹底です。自転車関連の交通事故が多いことから、学校を中心に、自転車ルール講習会や、自転車の正しい乗り方教室なども実施してきたほか、近年は児童・生徒の問題意識、利用者意識を高め、自主的な対応につなげるための取り組みも進めています。

来年度は同プランを策定してから、計画期間が終了する10年目を迎えます。これまでの施策の成果を検証しながら、今後の課題や可能性に

転車の意義を見直そうと、平成20年にこれをリニューアル。自転車を表す銀輪と、ビジネススタイルの短縮形であるピズを合わせた造語「ぎりんBizi」を提唱し、環境と健康の両立を図る乗り物として利用促進を図っています。

特に私たちが注目しているのは、モーターの力を借りて、坂道でも容易に走れる電動アシスト自転車の活用です。平成22年に、自転車を14台購入し、主に公用自転車として活用しています

身近な文化を発見しようと、退職したシニアを中心に、自転車でまちを散策する市民が増えています。



藤井 信吾
取手市長(茨城県)

ついて整理をしているところですが。

藤井 戦後間もなく競輪場が立地した取手市は、自転車競技のオリンピック選手を輩出するなど、スポーツ分野を中心に自転車が盛んな土地柄ですが、近年は市民の自転車熱が非常に高まっています。

その背景にあるのが、平成17年に行われた市町村合併です。これにより、利根川だけでなく、小貝川も流域に含まれたことで、河川敷を利用して市内をぐるっと一周できる地域環境が整いました。行政としてもこれに伴い、国土交通省の河川事務所とも連携して、サイクリングロードの整備を促進していますが、折からの健康意識の高まりも後押しし、多くの市民がサイクリングを楽しむようになってきています。

今では住民組織の「川を活かした地域づくり推進協議会」が結成され、サイクリングイベントを実施したり、著名なサイクリストによる講演や、パネルディスカッションなども開催するなど、官民一体となって自転車を活用したまちづくりを進めています。



堀 江南市も取手市と同様に川に恵まれた地域で、ちょうど6・5kmにわたって、木曾川左岸に接しています。これを地域活性化に生かそうと、「木曾川左岸 江南北部地区」都市再生整備計画を策定。国の採択を受け、木曾川

が、バッテリーの充電は、市役所と商工会議所に設置している「ソーラーサイクルステーション」で行います。平成23年度は約1600人が利用し、3000kmあまり走行したことで、CO₂は700kgも削減できました。私も公務が近くである際にはよく利用しています。

自転車が市民生活を豊かにする

細川 自転車ブームともいわれる昨今ですが、各市では以前から地道に取り組みを進められていることがよく分かりました。では、そうした取り組みの結果、どのような効果が表れているのか、お話しください。

藤井 取手市は、市民と取手市、東京芸術大学の三者が共同で行う「取手アートプロジェクト」で生み出された数々のパブリックアートや、寺社仏閣をはじめとした歴史的資源など、見るべきものが多いまちです。しかし、意外とそのことを知らない市民も少なくありません。

本市が典型的な東京のベッドタウンであることも関係しているでしょう。市内にマイホームを持たれたものの、毎日朝早く家を出て、東京の会社に通勤し、夜遅く帰ってくる。住んでいるものの、自分のまちに触れる機会が極めて少ない市民が多いわけです。

ぜひ、そうした方々がまちを巡るツールとして自転車を活用してもらいたい。そういう思いを込めて、平成20年に、自転車でもまちを巡ることをコンセプトにした「取手市観光アートブック」をつくったのですが、これが当たりました。退職したシニアを中心に、身近な文化を発見しようとして、自転車でまちを散策する市民が増えています。



西澤 久夫
東近江市市長(滋賀県)

市独自の造語として、「ぎんりんBiz」を提唱し、環境と健康の両立を図る乗り物として利用促進を図っています。

今、最も苦慮しているのは、高校生のマナー違反への対応です。左側通行が原則なのに、走ってくる車が見えた方が安全と、勝手な理屈をつけて、右側通行をする高校生が少なくありません。

服部 若者や子どもたちに、当事者意識を持たせることも大切です。茅ヶ崎市では、高校生が中心となって、左側通行を徹底するための「キー

プレフトプロジェクト」を実施しています。市内の自転車利用の実態を確認した上で、学校内や地域でのルール啓発の方法や、啓発グッズを用いた方法など、さまざまなアイデアを出し合っています。

また、最も事故の危険性が高いといわれる降雨中の「傘さし運転」への対応として、平成20年から高校生たちがレインウェアの開発、普及を進めています。そのほかにも、小学生が学校の周りの見通しの悪いところに「自転車止まれ」ステッカーを貼っていく取り組みなども展開しています。児童や生徒たちにも、問題意識を持ってもらい、対応策を考えてもらうことも重要だと思います。

西澤 一方的に「傘さし運転」を禁止しても、代替の手段がなければ、効果は出ません。その点、茅ヶ崎市さんのレインウェアの開発は効果的でしょうね。高校生自身がファッション性豊かなレインウェアをつくったとなれば、みんな納得して着用するはずですよ。

ヨーロッパのまちを歩くと、自転車に乗る人もみんなファッションブルです。ヘルメット一つとっても、すごくスポーティでしょう。格好も含めて、自転車を乗ることを十分に楽しみ、同時に安全性にも配慮している。日本でも、そうした文化が根付けば、状況は変わってくると思いますね。自転車用のヘルメットが日本で浸透しないのも、ファッション性に原因があると思いますよ。工事用と見間違えようなヘルメットが多いですから。

また、高齢者はどうしても暗い色の服を好んで着る傾向がありますが、これも交通事故を招く原因の一つになっています。日が暮れると、

暗い色では、周囲から見えにくいですから、交通事故防止のためにも、明るい色の服の着用を促すようなファッションシヨールを老人クラブと共同で開催するのもいいかもしれません。

放置自転車の原因と対策

藤井 市としては、放置自転車の問題も見逃せません。特に平日の朝は放置自転車のために、駅前は大変な混雑です。自転車駐輪場を設けているのに、駅前のロータリーに勝手に止める市民も少なくない。マナーの悪い人が一人でもいると、みんなそれを真似してしまう傾向があるから気が抜けません。近年は、シルバー人材センターや町内会と連携して、徹底して定位置に移動するなどの対策を取っているために、少しは改善されましたが、大きな問題です。

服部 茅ヶ崎市では放置禁止エリアに駐輪された場合は撤去することになっています。そのおかげで、状況は相当に改善されました。また、バス事業者と連携して、バス停付近に自転車を止め、バスに乗り換える「サイクルアンドバスライド」などの取り組みも進めています。

西澤 放置される自転車の中には、盗難自転車も少なくありません。もちろん、悪いのは窃盗犯ですが、自転車を大切に扱わない市民も問題



藤井 市としては、放置自転車の問題も見逃せません。特に平日の朝は放置自転車のために、駅前は大変な混雑です。自転車駐輪場を設けているのに、駅前のロータリーに勝手に止める市民も少なくない。マナーの悪い人が一人でもいると、みんなそれを真似してしまう傾向があるから気が抜けません。近年は、シルバー人材センターや町内会と連携して、徹底して定位置に移動するなどの対策を取っているために、少しは改善されましたが、大きな問題です。

暗い色では、周囲から見えにくいですから、交通事故防止のためにも、明るい色の服の着用を促すようなファッションシヨールを老人クラブと共同で開催するのもいいかもしれません。

西澤 1回の充電で30kmは走行できますから、普段はなかなか足を伸ばせないところまで、気軽に遠出することができます。積極的に外に出て、まちや人に触れることも健康を維持する条件でしょうから、その意味でも効果は大きいと思います。

細川 目的地まで行くまでも、自分の気分次第で、道草をしながら、途中経過も含めて楽しむことができる。そこが自動車との大きな違いであり、よさでしょう。さらに、江南市のように

にサイクリングのイベントを展開するなどすれば、交流人口の増加など、地域活性化にもつながりますね。

堀 市内だけでなく、市外からも、親子連れをはじめとして多くの人の参加がありました。こんなに自転車に関心がある人がいるのかと、逆にこちらが驚いたぐらいです。

藤井 自転車版「道の駅」ができれば、自転車の利用促進にもつながると思います。疲れた人が

休憩に立ち寄り寄るだけでなく、特産品や産直なども気軽に購入できれば、大いににぎわうでしょうね。

西澤 地域の店舗との連携も効果的だと思いますよ。例えば、飲食店で電動アシスト自転車充電できる設備があれば、自転車利用者のお客さんも呼び込めるし、利用者は腹ごしらえや休憩ができる。双方にとってメリットは大きいですね。

自転車を取り巻く課題にどう対応するか

細川 自転車の利用促進により、市民生活の向上も含めて多くの効果が出ている一方で、課題が出てきていることも事実でしょう。私自身、国土交通省道路局と警察庁交通局が共同で設置した「安全で快適な自転車利用環境の創出に向けた検討委員会」の委員を務め、昨年から今年にかけて議論を重ねてきましたが、いかにしてそうした課題に対応するのかがという点が、議論の大きなテーマの一つでもありました。この点についてはどのように認識されていますか。

堀 自転車は体力増強にもつながるし、環境にもやさしい。さらに、まちの散策にも便利だし、地域活性化効果もある。将来的にはさらに普及させていくべきだと思いますが、やはり課題があることも事実です。それは、自転車が利用しやすい環境整備の推進と、利用者のマナーの向上です。特に、交通事故対策として、自転車利用ルールの徹底は、何よりも重要です。本市でも、ある中学校では自転車通学の生徒に対し、「自転車運転免許証」を交付しています。学校独自の基準を設け、マナーを守る生徒は表彰する一方で、違反が目立つ生徒は、免許を取り上げ、自転車通学を禁止する取り組みです。



堀 元
江南市長(愛知県)

自転車通学の中学生生徒に対し、「自転車運転免許証」を交付するなど、交通事故対策に努めています。



細川 珠生
(政治ジャーナリスト)

です。鍵を掛けなかったり、不用心な市民も少なくないと聞いています。自転車の窃盗が、次なる犯罪につながっていく可能性もありますから、治安の意味からも無視できない問題です。
服部 自転車専用の保険制度を拡充することも解決策の一つとして有効かもしれませんが。ケガをしたときの補償にもなるし、保険がかかることで、自転車自体を大事に扱う意識が強くなると思います。

他都市との連携が今後の目標

細川 それでは最後の質問です。自転車を活用したまちづくりをどのように発展させていこうとされているのか、今後の目標や抱負などについて、お話しください。

藤井 今後の目標は、周囲の自治体と連携し、市域を超えた取り組みへと発展させることです。市内を流れる利根川は、利根運河を通じて江戸川にも、さらには千葉県側の下流にもつながっています。実際、平成20年4月には、利根川下流域の19市町村の参加の下、「利根川舟運・地域づくり協議会」も発足しましたので、観光交流も含め、自転車を活用したまちづくりを一

体となって展開できればと考えています。

堀 同感です。「遊歩道・サイクリングロード」も、江南市だけではなく、木曽川沿岸の5市町が一体となって進められたもので、これにより犬山市から一宮市まで自転車道路がつながりました。将来的には県境を超えた岐阜県の市町村とも連携して、サイクリングイベントなどを実施したいですね。

西澤 東近江市でも、本市と近江八幡市を縫って走る延長26・2kmの本格的な自転車道「びわ湖よし笛ロード」が整備され、周辺の名所・旧跡を自転車で巡ることができそうです。さらに、市内を走る近江鉄道では自転車を積んで乗ることができる「サイクルトレイン」も実施しています。

自転車と鉄道を組み合わせることで、さらに利用者の利便性は増しました。今後も、周囲の自治体や交通事業者との連携を強化して、施策を進めていきたいと考えています。

藤井 取手市では利根川の兩岸を結ぶ市営の渡し船があるのですが、ここでも自転車を積み入れることが可能です。

服部 周辺の自治体と連携することで、現在は、各メーカーによってさまざまな種類がある電動アシスト自転車の充電器の規格なども統一されれば、便利でしょうね。

西澤 他都市との連携ということであれば、多くの都市で、「自転車都市宣言」を行っていただきたいと考えています。平和都市宣言のように、多くの都市に広がれば、大きな力になるはずです。将来的には都市宣言を行った自治体同士で、連携して自転車活用における共通の思想、発想を打ち出していきたいです。

細川 自転車の利用をどのように促進するか。

まちづくりにどのように活用していくかという点について、ご議論いただきました。

自転車は決して新しい乗り物ではありません。古くから市民に身近なものです。現在の社会を取り巻く状況や問題を、象徴的に表している乗り物だと改めて感じました。もちろん、利用による課題もありますが、環境問題など、現代の社会問題を解決する重要なツールであることは間違いありません。いかに、市民の理解や協力を得て、課題の解決を図りながら、利用促進を図っていくか。まさに地域力が試される問題でもあると思います。これからも、地域を挙げて、市民生活と自転車が共存できるまちをつくりあげてほしいと願っています。本日は長時間にわたり、ありがとうございました。

(平成24年7月10日、日本都市センター会館にて実施)

本コーナーは隔月掲載となります。次回は11月号に掲載予定です。

